

平成28年度 国東市：大分県学力定着状況調査結果（中学校：国語）

1 結果のポイント

- ・偏差値平均は前年度より2.9ポイント上がっている。
- ・「活用」の偏差値は、「知識」より1.5ポイント下回っている。
- ・当該学年が小学校第5学年の時の偏差値52.4よりも0.6ポイント下がっている。
- ・「問題の内容」、「領域」、「観点」のすべての項目の正答率で、目標値や県平均を上回っている。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 読むこと（文学的文章**5**）（2）（3）

①出題のねらい

- （2）登場人物の心情をとらえることができる。
- （3）登場人物の人物像をとらえることができる。

②問題内容

文学作品の内容を読み取る

③解答状況

- （2）正答率60.3%であり、県平均62.8%を下回っている。
- （3）正答率58.7%であり、目標値60.0%を下回っている。

④指導の改善事項

- （2）では、「やられた」が書かれている次の段落に、「先生たちが好むような書き方を、無意識にしていた自分がはずかしかった。」とあるので、「やられた」と思った理由は、「無意識のうちに模範的な書き方の文章になっていたと気づいて衝撃を受けている。」になる。

場面ごとに中心人物の気持ちを想像するだけの指導ではなく、心情の因果関係に着目し論理的な読み方をしていくために、なぜそのような心情になったのかを考えさせる指導をしていくことが必要である。

- （3）では、「おれ」が変容するきっかけとなった部分、つまり「おれ」とタオの対照的な読み方について書かれているところから、2人の読み方の違いを読み取る必要がある。

「おれ」の読み方については、文章中に選択肢と同じ「感情移入」という言葉があり、その段落の最後に登場人物に「あこがれた」とある。よって、「おれ」は登場人物の魅力的な点を見つけて感情移入する読み方になる。

タオの読み方については、すぐ次の段落に対比するように書かれており、「ユタカのことをまるで悪者扱い」、さらに次の段落に、「アキラに肩入れしているわけではなく、アキラへの批判もたくさん書いてあった。」とある。よって、タオは登場人物を客観的に見て批判的に読んでいることになる。

中心人物の変容をつかみ、変容するきっかけとなった部分はどこなのか、なぜ変容したのかを明らかにする学習が必要である。そのことが、作品のおもしろさを味わうことにもつながる。

(2) 読むこと（言語活動に関する問題**6**）（1）

①出題のねらい

新聞記事と資料を読み比べて、新聞記事の工夫を選ぶことができる。

②問題内容

新聞記事の内容を読み取る

③解答状況

正答率63.0%であり、県平均63.1%を下回っている。

④指導の改善事項

説明的文章の指導においては、得られた情報と非連続テキストの情報とを合わせて考えたり、記述や論の展開の特徴について考えたり、内容から筆者の意図を捉えたりするといった様々な力を付けることが求められる。ゆえに順序よく詳細に読解するという指導ではなく、目的に応じて内容を整理する、必要に応じて引用する、複数の資料を比較する、別の言葉で言い換える、等様々な活動が必要である。

(3) 言語や文化についての知識・理解 **2** (1) ②、(2) ②、(2) ③

①出題のねらい

- (1) ②第1学年までに学習した漢字を読むことができる。
- (2) ②、(2) ③小学校で学習した漢字を書くことができる。

②問題内容

- 漢字を読む (1) ②は「起床」
- 漢字を書く (2) ②は「未熟、」 (2) ③は「慣れる」

③解答状況

- (1) ②は、正答率95.2%であり、県平均95.4%を下回っている。
- (2) ②は、正答率49.2%であり、目標値50.0%を下回っている。
- (2) ③は、正答率55.6%であり、目標値65.0%を下回っている。

④指導の改善事項

「起床」は生徒の日常生活の会話の中で、あまり使用していない言葉であり、多くはないが「床」を「ショウ」と読めなかった生徒がいたことが考えられる。

「未熟」の「未」は「末」、「熟」は「塾」と間違えるなど、形の似ている漢字と混同して覚えていることなどが原因として考えられる。また、「慣れる」の無解答率(32.3%)が高いことは「慣」を訓として使用することがあまりないと考えられる。

漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。日常的に学習できる環境を学校全体で整えていくことが大切である。授業の中で小学校の漢字を新たに指導する時間はないが、例えば、単元ごとの新出漢字プリントを作成する時に、教科書に出てくる単元内の既習漢字も入れていくと復習になる。また、常日頃から文章を書くときには、必ず既習漢字を使用するよう指導し、忘れている場合は辞書等を引いて調べて書くよう習慣化すると既習漢字の定着を図ることができる。

(4) 話すこと・聞くこと **1** (2))

①出題のねらい

聞き手に理解してもらうための話し方の工夫を聞き取ることができる

②問題の内容

話し合いの内容を聞き取る

③解答状況

正答率67.2%であり、県平均74.8%を下回っている。

④指導の改善事項

話を聞きながら、自分の知識や考えとの共通点や相違点を整理し、大事なことをメモすることを普段から習慣化しておくことが必要である。

また、話すときの全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成する力が、内容を聞きとるときの助けにもなるので、話すことと聞くこととを関連つけた指導が効果的である。

(5) 書くこと **7** (2))

①出題のねらい

3段落構成で文章を書くことができる。

②問題の内容

作文

③解答状況

正答率78.6%であり、県平均80.4%を下回っている。

④指導の改善事項

書く目的や意図に応じて集めた材料を取捨選択したり、関連を考えて分類したり、時間的な推移や因果関係に基づいて整理したりすることにより、書こうとする事柄のまとまりや順序が明確になる。その上で、段落の役割を考えて文章の構成を考える活動を行っていくことが求められる。

3 指導の改善のポイント

(1) 更なる言語活動の充実

付きたい力（指導事項）を明確にした単元を構築するなどの授業改善が求められる。具体的には、言語活動が当該単元で付きたい力にふさわしいものにする、単元の評価規準と指導過程の評価規準に整合性を持たせること、教師主導による詳細な読解から脱却し課題解決的な言語活動を設定することなどの取組を行っていく必要がある。

(2) 多様な図書資料等を活用する授業の推進

目的に応じた言語の能力を身に付けさせるために、国語科の教科書だけでなく、多様な図書資料等（書籍、新聞、その他のメディアからの情報）を用いることが必要である。

また、多様な図書資料等を活用する中で、例えば必要な情報を素早く見付ける読みや、必要な部分のみを詳細に分析する読みの指導が可能となる。

さらに、自分の考えを深めたり広げたりするためにも学校図書館等を利活用し、多様な情報を関連づけて読む経験が必要である。学習指導要領の言語活動例を参考にし、情報を活用して、条件に応じて自分の意見や考えを表現する活動の充実が求められる。

そのためにも、「不読者」を少なくする取組が必要である。1か月に1冊も本を読まない生徒の割合は全国平均の約2倍も多くなっている。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な生徒の学力を育成する基盤として、本に慣れ親しませることが求められる。また、豊かな思考には豊かな語彙形成が不可欠であり、それを促すという視点、あるいは、読書をすることにより、必ず自分を省みる機会になり、自分を高めることにつながるので、そういった視点からも読書指導の在り方を見直す必要がある。

	0冊	1～2冊	3～4冊	5～6冊	7～8冊	9～10冊	10～20冊	21～30冊	31冊以上
国東市	21.2	40.7	18.0	7.9	2.6	2.6	2.1	0.0	4.8
大分県	21.2	38.1	18.5	8.2	3.6	3.9	3.0	1.1	2.1
全国	10.7	41.3	24.7	10.9	4.6	3.1	2.8	0.7	1.0

(3) 「めあて」の設定や指導にいかすことができる「より具体的な評価規準」の設定

単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、より具体的な評価規準（概ね満足できる状況）を設定することが求められる。

この具体的な評価基準から本時のめあてを設定すること、また、評価規準に基づき、「C 努力を要する状況」の生徒を見極め、「B おおむね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。

また、学習の見通しをもたせ、学習の意味づけをさせることは有効であることから、「めあて－振り返り」、「課題－まとめ」を提示したり、考えさせたりすることは大切である。

(4) その他、国語科授業で取り組むべきこと

必要な言葉を使用し、言葉で思考を深めることが必要である。また、どのように思考するのかをきちんと理解させるためにも、例えば「要約」とはどのようなことであるのかを理解させておく必要がある。

少なくとも、中学校の教科書に掲載されている学習用語は、その学年で確実に理解させることが大切で、既習の用語は授業で使わせ、指導者があいまいな言葉を使わないようにしなければならない。小学校現場で行われているような学習用語の掲示も有効な取組である。

言語活動の成果物を掲示や展示することも効果がある。作成したものを互いに見ることで、励みになるとともに、ものの見方や考え方が広がる契機となる。

さらに、目的に応じて、様々な記述をする活動を行うことが必要である。記述は、「書くこと」の指導だけでなく、3領域の力を向上させるのに効果がある。

例（話す・聞く）	インタビュー等の取材メモ、スピーチ原稿等
（書くこと）	鑑賞文、図表などを用いた説明・記録、案内、意見文、批評文
（読むこと）	文章を読んで解釈し、自分の考え（感想や意見、評価、批評等）を明確に書くこと。 目的に応じて本文を引用したり要約したりすること。

また、「活用」に課題がある場合に求められる工夫として、条件に即応して記述しなければならない場面を設定することがある。時間・字数・文章の形態や種類・文体（常体・敬体・一人称・三人称等）・テーマ・対象・使用語彙・要約・引用・例示・技法（反復・倒置・比喩・反語等）・構成等、条件を踏まえる必然性のある活動を設定するとよい。

(5) 学校全体で取り組むべきこと

・漢字や語句、文法、表現技法等の習得

漢字や語句、文法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。特に漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えることが大切である。

・全校一斉読書や各教科における学校図書館の活用

様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。その際、文学的文章だけでなく科学的な読み物等にも手を伸ばすように指導する必要がある。

また、学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を利活用することも求められる。（【例】各新聞社から配信されるワークシートを短時間で行う。）そのために、国語科だけでなく、各教科や領域において、図書館の利活用の推進をしなければならない。